

社会面記事にみるジャカルタ

加 藤 剛

1980年9月末から、土屋健治助教授と交替で、ジャカルタの連絡事務所に1年間の予定で赴任した。ジャカルタ滞在中は、連絡事務所の仕事のほかに、ジャカルタに関する調査を行う予定である。主としてジャカルタに住む人々の生活を理解するのが目的だが、特に、多民族が共住するコスモポリタンな東南アジアの大都市で、種族という要素がどのような意味と役割を持っているのかを、ジャカルタに住むミナンカバウ族を中心として、同じくこの都会に住むバタック族、メナド族、ブギス・マカッサル族などとの比較の上で考えてみたいと思っている。資料収集という点では、ジャカルタに住む人々が、おのおのの社会階層の違いによって、どのような生活を送っているのかに関する調査・研究報告類を、1980年の10月から12月中旬にかけて集めるよう努力した。幸い、行商人・ベチャ引き・売春婦・浮浪者といった下流階層の人々の生活については、期待していた以上の数の研究があり、興味ある報告書類を手に入れることができた。いままで調べたところでは、上流・中流階層の人々の生活についての研究は、皆無に等しい。

ジャカルタに来て以来興味を持って読んでいるものに、『ポス・コタ』(Pos Kota)という、ジャカルタで発行されている新聞がある。『コムパス』(Kompas)、『シナール・ハラパン』(Sinar Harapan)といった「高級」紙にくらべ、『ポス・コタ』は一般大衆にアピールする「通俗」紙で、そこに掲載されている記事の内容も、ジャカルタで毎日起こる種々の出来事をより多角的に反映しており、面白い。『ポス・コタ』の1面には、国内・国際政治上の重要事や殺人事件といった犯罪事件のほかに、日本でいう社会面記事が、大見出しの写真入りでよく掲載されている。その内容は日本の社会面記事と共通するものもあれば、そうでないものもある。『ポス・コタ』



『ポス・コタ』紙の社会面

によく掲載される社会面記事の内容を列挙すると、次のようになる。

モグリの売春活動の検挙 ▽
若い女性の売買——これは売春婦あるいはお手伝いさんの要員——の摘発 ▽
強姦 ▽妊娠し

たあげくボーイ・フレンドに捨てられて警察に訴える若い女性のケース ▽行方不明の子供 ▽行方不明の大人 ▽(身の代金目当てでない)子供さらい・赤ん坊さらい ▽迷子ならぬ「迷い大人」——これは子供をジャカルタに訪ねてきた村の老人、あるいはジャカルタに最近でできたばかりのお手伝いさんで、買い物にだされた人に多い ▽イスラーム国民には珍しいと思われる自殺(殺人が多く刃物によるのに対し、自殺は大部分が縊死)、等等。

この種の記事は多いもので週2,3回、少ないものでも2,3週間に1回『ポス・コタ』の1面を賑わせている。私は以前西スマトラ州のミナンカバウ社会で調査したことがあるが、その州都である人口30万人のパダン(Padang)で発行されている日刊紙『ハルアン』(Haluan)には、この種の出来事に関する記事は、多いものでもせいぜい年に3,4回であったことを考えると、人口650万という大都会ジャカルタで起こる出来事、そしてそこに住む人々のさまざまな姿を思わずにはいられない。(京都大学東南アジア研究センター助教授)